岩渕 亜希子 准教授

社会学部 社会学科

Akiko Iwabuchi

[text：高橋 健太]

いわぶち・あきこ。追手門学院大学社会学部准教授。1999年北海道大学文学部卒業。同大学大学院文学研究科（修士）、大阪大学大学院人間科学研究科に学ぶ。大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任助手、追手門学院大学社会学部講師を経て2010年より現職。専門はエイジングの社会学、家族社会学、社会調査法。

人間は与えられた環境で生きる存在。大切なのは適応して楽しむこと。

たこ焼きパーティーに込められた真意とは。

みんなでたこ焼きをつくり、食べる。サークルのオフ会ではない。ゼミの一シーンである。

「たこ焼きを焼いて、遊んでいるようにしか見えないでしょう（笑）。もちろんそうではありません」。

岩渕准教授は認知症の介護に関する研究をしていた。そのとき認知症に罹患した人が最初にできなくなる家事のひとつが料理だと知る。それだけ料理が知的な作業であるということだ。出来上がりの時間から逆算して、複数の作業を同時並行的に手際よく行うための高度な段取りが求められる。〝たこ焼きパーティー〟はそれを学びに取り入れたものだ。買い出しから後片付けまで、役割分担して一連のプロセスを通じてチームワークを訓練する。たこ焼きが上手に焼ければご褒美になるというわけだ。

このように社会学部のゼミでは一見、遊びにしか見えない不思議なシーンをたびたび目にする。たとえばカードゲーム。

「1年と3年でカードゲームをさせると遊び方が全然違うんです。1年は与えられたルールの枠組みでやっている。だけど3年になると、自分たちでルールをつくって主体的に遊ぶようになります。それを可能にする人間関係も上手く作れるようになる。私はそれを成長だと思います」。

その後の人生で「じわじわと効く」学問。

この世に自分の思い通りになる社会は存在しない。与えられた環境で生きている。そのことを嘆くか、うまく適応するか。それだけで人生の質は大違いである。カードゲームはまさにその比喩になっている。

「つらいことはそれなりにかわして、制約のなかで自分がかかわりたい〝種〟をみつけて積極的に楽しんでいけるか。社会学はそういう力をつけることのできる学問だと思います。それを実現できる授業をめざしています」。

2010年に断行された社会学部のカリキュラム改革もその点が眼目だ。

他方、就職活動のような短期の取り組みに対して、劇的な成果が出るものではないかもしれない。

「就職活動で評価される能力は、自分の一部分に過ぎない。自分の好きなことをみつけて仕事にしよう、とよく言われますが、そんな就職ができる人は稀にしかいません」と、現実社会にしっかり向き合うという、ある種の厳しさも学ばなければならない。

「その後の人生でじわじわと効く」、人生の土台を形成する授業を志向している。

面白い授業をするのが大学の本道。今後も追求していく。

スパルタ的な押しつけで学生を一定の方向に導くという方法もある。しかし「強制されたものは結局後には何も残らない」という。

「大学は授業を面白くするのが本道」と日々学生に興味をもってもらえる授業づくりを思案する。「社会探偵学演習」などの科目名もその表れである。学生たちと接するとき、何に〝ヒット〟するのか。頭を悩ませる。

「実は学生たちの反応には常に気を配っています。いい反応があったときは内心ものすごく喜んでいます」。

授業では学生たちにも主体的な参加を求めている。「やりたいことがあれば提案してほしい。それが自分たちで授業をつくるということ」。

今度は〝たこ焼きパーティー〟以上にユニークな光景がみられるだろう。